

45. お盆と日本人の心

医事万華鏡

8月と言えばお盆。この祖先の霊を祀る新暦8月15日に
行われる仏教行事のために、多くの方が帰省されること
でしょう。ちなみに、お盆は正式には「盂蘭盆」と呼ばれ、
お釈迦様の弟子に当たる目連が、死後餓鬼道に堕ちてしまっ
た母親を救う供養の姿から始まりました。それが日本に伝
わり、推古天皇の時代(592〜628)に、宮中の正式
な行事として定着、その後、寺院の法要として一般化し現
在の供養の姿になったそうです。

そんなお盆の時期に、改めて日本人の精神性について振
り返ってみたいと思います。

日本人が拠って立つ基盤として、かつて世界に向けて発
信された道徳・倫理観に「武士道」があります。この武士
道精神を体系的に本に著したのは、旧5000円札の肖像
としても知られる新渡戸稲造(1862〜1933)です。
新渡戸は盛岡藩士の三男として生まれ、札幌農学校を卒業
後、アメリカやドイツで学び、国連事務局次長も務められ
た国際人でした。そんな新渡戸が『武士道』の執筆を思い立っ
たきっかけは、ドイツ留学の際にとあるベルギー人法学者
から、日本には特別な宗教が無いにも拘わらず、どうやっ

て道徳教育を授けられるのか」と尋ねられたこ
とであったそうです。その時こそ即答できな
かった新渡戸でしたが、自身の人格形成に寄与
してきた物の考え方を掘り下げていった時、「武
士道」に辿り着きました。そうして十年前に交

わした法学者の問いへの回答として上梓されたのが『武士道』
であり、『Bushido: The Soul of Japan』として1899年に
米国にて刊行されました。なお、新渡戸の考える「武士道」
とは、いわば「ノブレス・オブリージュ noblesse oblige (高
貴な身分に伴う義務)」のようなものとも解釈できます。

もともと、新渡戸の前に武士階級が消滅した後に「士魂(武
士道)」に基づく独立国家の重要性を唱えた人物として、福
澤諭吉(1835〜1901)の存在を忘れるわけにはいき
ません。福澤は『通俗国権論』(1878)の中で、今の禽
獣世界に処して最後に訴うべき道は必死の獣力に在るのみ
とし、この「禽獣世界」で日本が独立を維持するためには、「士
魂」や「士風」を擁した指導者の下で、国家が国家として凝
縮した力を発揮しなければ生き延びていくことはできないと
唱えました。非常に怜愍なこの福澤の眼差しは、徹底したり
アリストのそれと言っても過言ではありません。

毎年訪れるこのお盆の時期、自身と繋がりのある祖先の御
霊を鎮めるだけでなく、かつて日本の行く末を案じ、社会の
変革に情熱を傾けてこられた誇るべき日本人の御霊に敬意を
示すと共に、その姿勢を学ぶことで供養とする機会とされて
はいかがでしょうか。

(JMS主幹・野村元久)

